



【アドベント／待降節】

アドベントとは日本語で「待降節」ないし「降臨節」と言い、特に教会暦に従う教派（ルター派、カソリック教会等）において主イエス・キリストの降誕日を待ち望む期間を指します。アドベントのもう一つの意味は、今の世の終わりを告げる出来事、つまりキリストの再臨をクリスマスに向けて毎週心に覚えることです。アドベントの時に克蘭ツ（Advent Wreath）の4本のロウソクに毎週一本ずつ火を灯して行きますが、第一週（希望）、第二週（愛）は紫、第三週（喜び）はピンク、第四週（平和）は紫のロウソクにそれぞれ順に火をつけます。これが教会暦に従う教会の正式な習慣ですが、教会暦にこだわらない教会ではロウソクの色はこだわりません。



【キリストの降誕】

三浦綾子「イエス・キリストの生涯」より

私には弟が四人、妹が一人だから赤ん坊が我が家に生まれたという喜びを、子供なりに味わったことを覚えている。小学校三年生の頃私はキリスト教会の日曜学校に通っていた。ある日、イエスの誕生カードをもらって、私は不思議に思った。大人が小さな赤ん坊を拝んでいる絵を見たからだ。我が家に赤ん坊が生まれても、むろん誰も拝みはしなかった。みんなでのぞき込んだりしたが、拝んだ者はなかった。それで、赤ん坊を拝むカードを見て不思議に思ったわけである。

イエスを拝んだのは、イエスが神の子であったからだ。神の子でなければ拝む必要はない。拝むか拝まないかはイエスを神の子とするか否かによる。

イエスは単なる人の子だとする人がいる。イエスが神の子だとする人もいる。



これは決して、どうでもよい話ではない。もし、イエスが単に人の子であるとすれば、キリスト教は崩壊する。キリスト教はこの世から滅び失せる。もしイエスが単なる人間であるならばイエスを神の子キリストと信じて生きた有史以来の信者たちは、最も哀れな人間どもということになる。もしイエスがキリストでなければ、迫害に耐え、殉教した信者たちは滑稽な道化師ということになる。そして、キリスト教文学もキリスト教音楽も、キリスト教美術も、その立ち所を失って滅ぶ。

あなたはイエスを神の子キリストと崇めるか、崇めないか。これこそは、私たち人類にとって最大の問題なのだ。とにかく私は崇める。イエスこそは正に神の子キリストであると。なぜなら私は信じて絶望から希望へ、暗闇から光へと、人生を一変させられたからである。■

【先週のMESSAGEより】

神の深い配慮の末に／ヨセフの生涯（4）創世記42～45章

●ヨセフは自分の息子たちに**マナセ**：神が私の全ての労苦と私の父の全家とを忘れさせた、**エフライム**：神が私の苦しみの地で私を実り多い者とされた、とそれぞれ名付け、もはや過去を断ち切ってエジプトで暮していた。しかし人間そう易々過去を断ち切ることはできない。

●ヨセフの兄弟たちは状況がもっと悪い。彼らはすでに20年以上も真実を隠ぺいし「ヨセフは死んだ」と父ヤコブを欺き続けて来ていた。告白しない罪は恐怖心、疑心暗鬼、自己嫌悪、責任転嫁など様々な否定的な状態を生み出し、人間の心を破壊して行く。●神がこの12人兄弟に赦しと和解の機会を与えて下さったのは一重にご自身の憐れみによる。その同じ神は私たちをも、もつれた関係や問題だらけの状況から解放し自由にしてくださりたいのである。神はちょうどよい時に問題を解決するための機会を与えて下さる。それゆえ神に祈り続けて時を待とう。●兄達はヨセフの前で「正直者です」と訴えるがヨセフはこれに引っかかったかも知れない。ヨセフは兄たちの心根を探ろうとする。最終的にヨセフが兄達を心の底から赦すことができたのは兄ユダが自分の命に掛けて、父ヤコブに対する忠誠と愛とを示した時であった。●人間関係のこじれは根が深い。しかし人が神に近づく時に解決の糸口が与えられて行くのである。兄弟達の中でヨセフは神と親しい交わりを持ち、神の力と導きの中で生きていた。私たちが直面している状況の中であなたのみがクリスチャンかも知れない。しかしそれだけで既に問題は半分解決しているのである。神に期待しよう。

【今週の暗唱聖句】

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。

ひとりの男の子が、私たちに与えられる。イザヤ9章6節

聖書の「預言」は実に不思議なものである。聖書の中で預言がなされ聖書の中で預言が成就して行く。実に新約聖書そのものが旧約聖書の

預言の成就、という位置関係にある。そしてイエス・キリストの誕生とその苦難と死、再臨こそ、旧約聖書の預言の中心主題なのである。神は既に成就した預言の実績を私たちの前に示し、これから後に起ることにしても「信ぜよ」と我々に迫って来られる。キリストを信じれば、滅びることなく、永遠の命を持つことをあなたは信じるであろうか？

